

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270400403		
法人名	社会福祉法人 清和福祉会		
事業所名	社会福祉法人清和福祉会グループホームゆたか荘ベルホーム		
所在地	長崎県諫早市長田町2781番地1		
自己評価作成日	平成 31 年 1 月 18 日	評価結果市町村受理日	平成 31年 3月 29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1
訪問調査日	平成 31年 2月 19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・「笑顔とありがとうのあふれる事業所」、「施設のすみずみまできれいな事業所」を目指し、平成28年1月から3年間、外部から講師を招き2か月に1回全職員を対象とした研修を行い、法人全体で取り組んでいます。居心地の良いきれいな環境で、相手を思いやる心を大切に、日々過ごしています。

・ご家族との関係も大切にするため、写真を添付するなどした毎月のお便りを作成して、ご利用者の暮らしぶりや毎月の活動状況をお知らせしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

諫早市郊外の自然豊かな環境の中に位置するグループホームゆたか荘ベルホームは、開設18年を迎えている。ホームは同法人の通所介護施設や居宅介護支援事業所、特別養護老人ホームなどと同じ敷地内にあり、入居者は他事業所利用者との交流の機会を持つことができ、身体状況が変化した場合にも柔軟に対応することが可能となっている。ホームでは年々入居者の重度化が進み今年度は入居者の住み替えが多い1年となったが、職員は専門性を持った関わりの中で入居者の状況に臨機応変に対応し、今までの生活がホームでも継続して行えるよう職員間で話し合いを持ちながら支援に努めている。入居者の不安に寄り添う職員の明るい関わりが、入居者の心を和ませる様子が窺われた。管理者は今年度地域まちづくりフォーラムへ参加し、地域の高齢者の暮らしを支える地域の一員として地域の課題に向き合い、住み慣れた地域で暮らすための方策を考える機会を持った。ホームができる範囲で積極的に関わりを持ち、今後も地域の福祉力向上に尽力する管理者の姿にますます期待の持てる事業所と言える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット名 ゆたか荘ベルホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の基本理念「安全」「健康」「尊厳」「処遇」「リハビリ」のもと、生活支援を行っている。	ホームでは法人理念を会議室や共用空間に掲示し、理念に掲げる言葉の意味を法人の会議で振り返りながら実践に繋げている。職員は『安全』を念頭に入居者の健康を第一に考え、ケガや身体の変化に注意を払いながら尊厳のある暮らしが継続できるよう取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年に数回、近隣の小・中学校からの施設訪問や職場体験などがあり、ボランティアの訪問もある。	ホームは隣接する事業所での慰問に参加し、地域のボランティア団体との交流や近隣小中学校からの職場体験の受け入れを行い、高齢者の暮らしへの理解や認知症を持つ高齢者との関わり方について理解を深めている。今年度は地域まちづくりフォーラムへ参加し、地域が抱える悩みや課題を把握するとともに、ホームでできることは何か考えるきっかけとなり、今後も地域の一員としてともに考えていく意向にある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	管理者が認知症キャラバンメイトとして市役所職員と連携しながら、老人会やいきいきサロン、民生員の方々へ話をしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	市職員・包括職員・民生委員・老人会・自治会代表などに参加して頂き、活動内容や実施内容について御意見を頂きながら、サービス向上に努めている。	定期的に行われる運営推進会議では写真を用いながらホームの現状を伝えており、意見交換の場ともなっている。参加者である自治会や民生委員の方からは様々な意見が出されており、介護の質の評価を受ける機会として活用されている。民生委員からはホームの景観や外部からの印象が議題として挙がることもあった。課題に迅速に対応する姿勢で関わりが持たれていることが窺える。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者へは、運営推進会議の他、役所へ出向き利用状況や今後の方向性などについて、話し合う機会をもっている。	施設長兼管理者は、市担当者とは運営推進会議を中心に関わりを持ち、ホーム運営上の悩みや疑問を積極的に尋ねながら顔が見える関係づくりに努めている。運営推進会議では支援の方向性やホームの現状以外にも法人内の状況が伝えられ、地域と法人の関わりについても周知が図られている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日常での入居者の様子を観察し、行動を制限しないよう職員間での連携に努めている。	ホームは身体拘束をしない方針で入居者と関わりを持ち、今年度はホームが掲げる指針の再確認のほか、スピーチロック(言葉による拘束)やベッド柵の使用など、事例を通して職員自らの支援を振り返る機会を設けた。職員は要介護施設従事者等高齢者虐待について外部研修に参加し、職員研修では言葉や心理的虐待について共通認識を図りながら身体拘束に繋がらないよう日々の支援に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止に関する研修を受けている。入浴などを通じ身体状況を観察し、虐待を見逃さないよう努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業や成年後見制度について研修を受けており、必要性のある方へは常に情報提供できる体制にある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、パンフレット・重要事項説明書などを用いて説明し、理解して頂けるよう努めている。また、不明な点については随時対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に最低1回、御家族様へ来荘して頂き、現場の職員を交えてカンファレンスを行っており、その際意見要望をお伺いするようにしている。またご家族の代表に運営推進会議へ出席して頂いている。	職員は、家族面会時に入居者の一日の生活状況が把握できるよう24時間シートを示しながら暮らしぶりを伝え、心身の状態の変化に伴う家族の心情に寄り添う対応に努めている。また、家族へ説明する際には専門用語の使用をなるべく控え、職員自身の気づきを伝えながら不安を取り除けるよう取り組んでいる。家族の事情に配慮した連絡方法の確認も行っている。	ホームではSMSなどを用いて家族との情報共有を図っているが、ホーム便りなどの準備がないため行事や運営状況が家族に伝わりにくい様子が窺われる。ホームと家族との連携を密にするためにも、今後広報誌や掲示物などの情報発信ツールの活用が望まれる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃から職員とのコミュニケーションを心がけ、職員会議などで話し合う機会を設けている。	ホームでは職員の日々の気づきや対応方法についてその都度話し合いの機会を設けており、職員が主体的に働き掛けながら業務改善に向けた取り組みがなされている。入居者への対応方法については24時間シートで実践状況の共有を図っている。管理者と職員は年に3・4回程度面談を行い、現在感じることや働き方の意向の確認をしながら職場環境の改善が図られている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	無理なく働ける体制づくりのために夜間帯は専門の職員を設けている。給与については、キャリアパスを採用し職員の意欲向上に繋がるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	県社協や他の外部研修への参加を促し、また、事業所間の交流など職員の知識・技術の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	諫早市グループホーム連絡協議会へ参加し、研修や情報交換の場としている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接によりアセスメントした内容を職員間で共有し、本人が早く馴染んで頂けるよう積極的な声かけを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事業所の性質を理解してもらうとともに、家族の現状の介護負担や精神的負担を把握する事で問題意識を共有し安心して活用できるようお話している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	直近の生活状態を把握することにより、必要なサービスの確認を行い、生活維持への支援ができるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人がやりたい事・できる事を把握し、洗濯物たたみや作業活動などその方に合った役割作りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会等での来荘を促すと共に、家族参加の行事などを企画しながら、本人と家族が一緒に過せる時間をつくれるよう心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	毎月お便りを送付したり行事参加への呼びかけ、また面会時には一緒に食事をして頂くなど馴染みの方との関係維持に努めている。	職員は入居者本人がこれまで大事にしてきた関わりを大事に捉え、家族の面会や知人の訪問があった際には自宅と同様に部屋でゆっくりと話ができるよう努めている。家族の中には昼食を持参し一緒に寛ぎの時間を過ごす方もおられ、本人の寂しさを考慮しながら家族との関係性を繋ぐことにも配慮が窺える。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーションや体操、季節行事など、利用者同士で活動する機会を設けている。また、利用者同士の交友関係に配慮しながら座席などを決めている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も家族や関係者から状況を聞いたり、必要に応じて面会に出かけるなどしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃から利用者との対話や言葉・しぐさから思いを汲み取る努力をしている。意思の確認が困難な方でも家族から関心ごとを聞くなど心掛けている。	職員は入居者との会話を大事に捉えており、その方の考え方や暮らし方の意向を職員間で共有しながら一人ひとりに応じた過ごし方ができるよう努めている。また、入居者の表情の変化や行動に気を配り、生活背景に合わせた言葉掛けを行いながら不安や寂しさに寄り添う姿勢で関わりを持たれている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始時や日常の中でアセスメントを行い、これまでの生活歴や生活環境など本人・家族からの聞き取りなどで情報を得るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の生活状況を把握しその方に合った関わり方を心掛けている。また心身の状況や変化等は記録し、情報の共有に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	年に最低1回、ご家族様参加のカンファレンスを行い、その場で、本人や家族、職員から意見を収集し、利用者の状態に即した介護計画になるよう努めている。	ホームでは入居者の心身の状態に合わせた介護計画となるよう職員間で話し合いを行い、状態に即した内容となるよう作成している。職員は計画に示された援助内容を実施しながらも本人の可能性を引き出せるよう働き掛けを工夫し、家族と相談しながら現状が維持できるよう努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ミーティングや職員会議、個別記録や申し送りノートにて、利用者の心身の状況や変化を職員間で共有しながら日々の処遇を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	枠にとらわれることなく、要望があった時には柔軟に対応するよう心掛けている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	当法人関連施設や近隣の学校との交流、移動図書館の活用、ボランティアの来荘など、楽しみのある生活が送れるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族と話し合いながらかかりつけ医を決めている。受診は職員が対応し必要に応じて家族にも同伴して頂いている。2週に1回は協力医の往診があり、また体調不良時には早目に連絡を取り相談、指示を仰ぐようにしている。	ホーム協力医による往診が2週に1回あることから入居後にかかりつけ医を協力医へと変更する方も多いが、家族の支援や希望があればこれまでのかかりつけ医の継続受診も可能となっている。職員は入居者の健康状態をこまめに観察し、医療機関と連携を図りながら必要な医療を受けることができるよう努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	法人内の看護職員と連携をとりながら、健康管理などで相談、助言をもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	利用者の定期受診などで日頃から訪問、又は電話にて情報交換を行っており、いつでも相談ができる医療機関を確保している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りはしていないが、主治医との連携を密にしている。事業所での対応能力についても家族・主治医に説明し理解を得るよう努めている。	現在家族の希望で医療を望む方が多く、ホームでの看取りは行っていない。入居者の心身の状態が悪化した際には経口摂取ができるぎりぎりまでをホームで対応し、医療の比重が大きくなった場合には他施設への移り住みで対応する方が多い現状にある。ホームでは看取り介護が望まれる時代になっている意識を持っており、医療との調整や看取りの実施に向けた情報を法人内で共有しながら今後取り組む意向にある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時のマニュアルを配布し、全職員が対応できるように備えている。また定期的に普通救命講習を実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	緊急連絡網を整備し近隣の長田中学校へも連絡がいくようにして協力体制を作ると共に、緊急時の避難訓練を行っている。 (県央消防本部主催の初期消火練法競技大会へも参加している。)	ホームは定期的な火災訓練に限らず地震災害にも意識を持って取り組んでおり、今年度は車両を使用した法人内事業所への屋外避難訓練を実施している。これまでの経験をもとに入居者の避難誘導方法や持ち出し品の意識付け、職員間の連携方法などの課題も抽出されている。また、職員のみならず入居者が訓練に参加することによって有事の際に迅速に対応できるよう取り組んでいる。現在ハザードマップの掲示がないため、地域の理解を深めるとともに安心を図る取り組みが今後望まれる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員が利用者の人柄をよく理解し、その方にあった声の掛け方・関わり方を実践している。介護者の都合や馴れ合いの関係で個人の尊厳を忘れないよう、職員間で接遇のあり方を見直すよう努めている。	ホームは『笑顔とありがとうが多い事業所』を目指し、入居者や職員が気持ち良く過ごせる環境づくりに努めている。職員は入居者にとって何が一番のサービスなのかをそれぞれに意識し、入居者にとって自信を失いがちなことについても前向きな言葉に置き換えながら、その方が自信を持ってその方らしく過ごせるよう支援に取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	介助する前には声掛けにて本人の意思を尊重するようにし、確認を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人ひとりのペースに合わせた対応を心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が好んで着ていた馴染みの衣類などを家族に準備してもらっている。 入浴時の衣類の準備も出来る方には本人立ち合いで準備してもらっている。1～2か月に1度、訪問美容師にきて頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	箸や湯のみ・お椀など一人ひとりが使い慣れた物を使用し、皆で顔を合わせ楽しく食事ができるように配慮している。また片付けの出来る方にはお盆拭きなどを手伝ってもらっている。	ホームではリハビリ専門職員より姿勢の指導を受けることができ、入居者が安定した姿勢で自ら食事が摂取できるよう道具の工夫もなされている。職員は、病気の特性でスプーンを口に運ぶことが困難な入居者には傾斜のついたトレイを準備したり、テーブルの高さを調整したりするなど、入居者それぞれに合わせた食事環境を整え取り組まれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個人別に嗜好調査を行っている。栄養士によるバランスのとれた食事を提供し、個々に合わせた食事形態で対応している。夏は水分摂取の為工夫してゼリーなども取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の能力に応じて、声かけまたは介助にて食後の口腔ケアを行っている。うがいが困難な方に関しては、口腔ケア専用の拭き取りで清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを知り、残存機能を活かしながら排泄支援を行っている。日中はトイレへ誘導し排泄を促している。夜間オムツ対応が必要な方も日中はトイレへの誘導を行っている。	ホームではできるだけトイレでの排泄を促し、入居者に応じた働き掛けを行いながら自分からトイレに行こうかと思えるような声掛けの工夫がなされている。職員は入居者ができるだけ自分の力で排泄できるよう介助が必要な部分のアセスメントを行い、身体機能に応じた移動・移乗方法を検討しながら現状維持ができるよう努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェックや水分補給の実施。自然排便が少ない方に対しては主治医と相談し便性状等を報告し、個々の状態に合わせた下剤の調整をしてもらっている、。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回、曜日を決めての実施である。その日に入りたくないと言われた方、また体調不良の場合については、翌日実施など日にちをずらして対応している。	職員は入居者一人ひとりの入浴方法を把握し、寛ぎながらゆっくり時間を掛けて入浴できるよう配慮している。入居者の中には入浴に対して消極的な方もおられるが、職員はその方の困難な部分やまごつきを理解しながら、できるだけスムーズな入浴となるよう取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食事や日中に活動を通して個々に合わせた生活のリズム作りを心掛けている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局から処方されたお薬の調剤表はファイルに綴じている。変更があった際は事業日誌に記載し、全職員に周知を図っている。薬の変更時は状態の観察を行い、変化があった際は、かかりつけ医に報告している。また服薬マニュアルを作り、誤薬防止に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の中で個人に合わせた役割作りや、利用者・職員が共同でできる壁画づくりや季節行事などの実施にて生活の中で楽しみを持って頂けるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	敷地内への散歩や、併設施設への訪問は個別に対応し気分転換を図っている。お花見やドライブ支援など、利用者の体調を考慮しながら行事計画に取り組んでいる。	ホームでは現在、行事などの全員参加型での外出は困難な現状にあるが、職員は入居者の心身の状態に応じて、食事への外出や本人が行きたい場所への外出など個別での対応を行っている。入居者はホーム玄関先で外を眺めることも多く、職員は法人内職員の協力も得ながら入居者の行動を把握し、自由にホーム周辺の散歩に出掛けることができるよう努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が難しい為、家族管理とさせてもらっている。本人より物の購入の希望があった場合は、事前に家族に本人の希望を伝え了解を得た上で立替購入するようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の希望には対応している。また、家族へは毎月お便りを発行し、本人さんの生活の様子を写真などで見ていただいている。ホームページにも静止画や動画をブログにアップしている。手紙も希望される方には書けるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関・食堂には花を飾り季節感を出し、リビングにはソファ・テレビなどを置き、音楽を流すなど団欒できる環境作りをしている。	ホーム共用空間は車椅子の方も自由に行き来できるような家具の配置に留意し、入居者が思いおもしろい場所で自由に過ごせるよう配慮がなされている。運営推進会議参加者からは共用空間に面した植林によって見晴らしを損ねているとの意見があったため、法人として年度内に対応できるよう検討する意向にある。	入居者や家族が出入りする玄関には季節の花が飾られ、ホーム共用空間の壁面には手づくりの季節行事の飾りつけがなされているが、一部季節がずれた装飾や古びた掲示物によって情報の鮮度が損なわれている印象が窺われる。再度ホーム内の掲示物や装飾の見直しを行い、訪問者へ与える印象を振り返る取り組みに今後期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにはソファを置き、利用者同士で団欒する場所に確保や、一人で過ごしたい時は食卓テーブルで過ごすなどの工夫をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた生活用品(寝具・衣類など)や家族の写真など、必要なものや本人が希望される物は持ち込めるようにしている。	居室には入居者の馴染み深い家具のほかにも手回りの持ち込みがあり、職員は家族と相談しながら入居者が落ち着ける空間づくりに努めている。入居者の目線や手の届く範囲に使い慣れたものを置くことによって入居者が自分で身なりを整えるなど、その方らしい生活が継続できるよう配慮がなされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人の能力に応じて居室内のベッドや家具の配置を工夫している。		